[二章　聖地動乱](file:///C:\Users\%E9%A2%9C%E5%BB%BA%E5%BF%A0\Documents\%E5%B0%8F%E8%AF%B4\%E5%A4%84%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E6%97%A5%E6%96%87%E5%8E%9F%E7%89%88\(%E7%94%9F%E8%82%89)5%E5%87%A6%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%AE%E7%94%9F%E3%81%8D%E3%82%8B%E9%81%93%EF%BC%88%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%B3%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89%EF%BC%89%EF%BC%95_%E2%80%95%E7%B4%84%E6%9D%9F%E3%81%AE%E5%9C%B0%E2%80%95_(GA%E6%96%87%E5%BA%AB%20-%20%E4%BD%90%E8%97%A4_%E7%9C%9F%E7%99%BB%20-%20%E5%89%AF%E6%9C%AC\OEBPS\text00017.html#toc-003)

　モモがアーシュナとともに聖地にたどり着く、数日前。

　アカリと一時の別れを告げて が乗った列車を見送ったメノウは、まず同じ駅にいるはずの男を探した。

　駅の構内にいることはわかっていた。アカリを追って来る途中に目撃したのだから間違いない。その時はアカリを優先したために見逃したが、いまはアカリを追いかけるために彼の力が必要だ。

　注意深く駅構内を見渡すメノウに、背後から語りかける男がいた。

「やあ、お嬢さん。構内できょろきょろしているところを見るに、列車に乗り損ねたと見える。これから向かう先の列車でも探しているのではないかね？」

　あまりにも絶妙なタイミングに、見計らったように現れる。

「もしもお困りだというのならば、手配しようではないか」

　誰かがなにかを欲している時に、必要なものを差し出せるのが『盟主』カガルマ・ダルタロスだった。

＊＊＊

「よく似合っているね。年若い娘さんが着飾る姿は眼福だよ」

　大聖堂に【 】の一員として堂々と入り込んでから一夜明け、『盟主』カガルマは着物姿のメノウに嬉々として賛辞を送っていた。

　いまメノウが着用しているのはマノンの持ち物から拝借した着物だ。小顔で頭身バランスが っているメノウは基本的になんでも着こなすため文化が違う着物もよく似合っている。

「君は『 』から導力迷彩を引き継いでいるのだろう？　それでいながら、服は迷彩ではないのがまたいい。こだわりがあるのかい？」

「い、いえ、別に着飾っているわけじゃないわ。導力迷彩でごまかすのも、楽じゃないもの。ただの節約よ」

　相手のテンションの高さに若干引き気味になりつつも返答する。

　メノウは動きながらでも導力光を操り姿を偽る技術『導力迷彩』を習得していたが、元が困難な技術なために維持には精神を削る。

　服を調達するコストと比べれば、一瞬の油断で虚像が崩れる導力迷彩はリスクが高い。潜入任務の時にモモがメノウの服をつくってくれる理由でもあった。

「私とマノンは背格好が似ているから、変装も楽ね。迷彩でごまかす部分は、少なければ少ないほど楽だもの。だからマノンから着物を拝借させてもらったわ」

　カガルマがひたすらに服装ばかり褒めるあたり、もしやただの和装好きなのではとメノウの頭に邪推が浮かんでいたが、他人の趣味に口を突っ込むのも失礼な話だとぐっとこらえていた。

　メノウが軽く腕を動かすと、 がひらりとたなびいた。

　メノウはまだ動きながらの迷彩技術を身に付けてから熟練するほどの日は っていない。いざとなればやるが、いざという時以外は進んで採りたい手段ではなかった。

「それよりも、どうしてあっさりと私の同行を許したの？」

「もちろん、君の信用を得るためだとも！」

　 との の後に、メノウは真っ先に『盟主』を探した。よくも悪くも と縁が深い彼ならば、なんらかの手段を持っていると確信があったのだ。そうでなくとも必要な情報を得るために接触する価値はあった。

　だからといって、彼を信用しているわけではない。調子のいい言動のカガルマへ、冷ややかな視線を送る。

「へえ？　背後を取られて脅された覚えがあるけど、それはどう考えればいいのかしら」

「そういうことがあったからこそ、いまこうして君の信頼を勝ち取るために協力しているのだよ。あの時だって、君とゆっくり話したかったと言ったではないか、『 』」

　にこやかに語るカガルマの言葉は、筋自体は通っているのに、不思議なほどにうさんくさく感じる。

　根本的な部分では、メノウは彼のことを一切信用していない。基本的に敵であるとすら思っている。だからこそ遠慮のない嫌味を飛ばしているが、カガルマと接触することで得られたものは予想以上だった。

「ここに来るまでに、いろいろと貴重な話を聞かせてくれたのも私の信用を得るため？」

「もちろん。君の知らない『 』の過去話だって披露したではないか。少しは私のことを認めてくれてもいいものだと思うがね」

　メノウも に聞いていた、 『 』の全盛期。決して本人が話すことはなく、伝聞のみだった話は当事者の一員であるカガルマから語られた。真偽はともあれ、興味深い話だったのは事実だ。

「君は旧友の弟子だ。もっとフランクに、私のことはカガルマおじさんと呼んでくれてもいいのだよ？」

　ぞわっと鳥肌が立つ。メノウは自分の手が無意識に太ももに隠している短剣へ伸びていたことに気がつき、せきばらい。意識して手を膝に乗せる。

「私が確認したいことは、過去の『 』よりも現在の の動向よ。 の動きは、アカリを殺すためだけにしては明らかに迂遠すぎるわ」

　カガルマのペースに流されては話が進まないと、切り替える。

「 は、アカリを 化させようとしているとみて間違いないのね」

「ふむ……そうだね。まあ私に聞くまでもなく、頭がいい君のことだ。この世界の文明の根幹。魔導の成り立ちについては仮説くらい立てていたはずだ」

　ここに来るまではカガルマが延々と昔話をしていたせいでたどり着かなかった部分である。

　話してみたまえと、真実を知っている者特有の目線を送る彼に、メノウは受けて立った。

「純粋概念を宿した異世界人が暴走し、 が生まれると同時に、彼ら彼女らが魂に宿していた概念が、この世界に遍在するようになる。そうして私たちのような、この世界に生きる人間にも利用できる魔導になる。……そうでしょう？」

「その通りだ」

　異世界人の暴走である、 化。それは災害であり、同時に恩恵でもあった。

「魔導とは、ことごとく純粋概念の模倣と劣化でしかない。導力とは現象を具現化するエネルギーだが、具現化するための現象概念の根幹が純粋概念なんだよ。【 】どもはそうして魔導を しながら、この千年過ごしてきた」

　純粋概念を付与させることは、魔導の存在を引き出すことに等しい。彼らの魂が純粋概念に乗りつぶされると同時に、いままで存在しなかった魔導が生まれるのだ。

「殺すべき異世界人と暴走させる異世界人すら【 】が選別している」

「『塩の剣』までの道を、わざわざ大聖堂で管理しているのも【 】に関係あるのね」

「あれは数少ない、 にでも扱える不死殺しの武器だからね。かといって、処分するにはあまりに惜しい品だ。誰にも触れられず隔離しておくのが賢い選択ではあるのだろう」

　古代文明期と違って飛行技術もないいま、大海に浮かぶ小島となった塩の大地を発見するのは、まず不可能だ。

『 』の提唱者カガルマ・ダルタロスは、ぎらりと目を光らせる。

「世界の統治は小分けにしたほうが楽だ。情報も流通もなければ、大衆は孤立する。そのうえで自分たちは情報を集約できるシステムをつくった。異世界人による の被害を無視してね。召喚される異世界人だって、被害者だ」

「それは……」

「神官の持つ教典は情報収集システムの一部だ。集めた情報は大聖堂にいる で精査し、年に一度の会議で【 】に周知される。世界管理の一環でね」

「未開拓領域すら人為的に造られたものだって言うの？」

「いくつかはね。本当の意味で手に負えない地域は、決して多くない。広すぎる領土は、過去に削られるか分断されてきた。それによってこの大陸国家は、 が反乱できない程度の集まりに分けられた」

　人の流れが分断されれば、情報の共有はなくなる。

　それを覆して統合しようとしたのが『 』だ。

「ここまでは大司教クラスなら知っている事実だよ。彼女たちは一国家の教区を預かる立場にいる。聖地に集めた情報を受け取る役割も担っているからね」

　多くの教会には遠距離通信が可能な祭壇が設置されている。教典魔導にあるそれを特化させた通信体系を使えば、国家を超えて情報を届けることも可能だ。

「人は幸福に生きる権利を持っている。そのすべてが、自由であるべきだ。『迷い人』など保護するべき弱者だよ。だというのに【 】の連中ときたら、この世界の支配者気取りときた！」

「あなたが『 』を提唱したのは、それが許せなかったから？」

「許せるものかね？」

　声を荒らげてから、カガルマが顔を押さえる。

「果てに自分が知らぬ間に【 】の一員となってしまったなど、許せるものではないんだよ……」

　その声には、力がなかった。

「あなたは【 】になったのね」

「ああ、不幸な偶然さ。そうなるとは知らなかった。それだけのことだよ」

　ここまで【 】の存在を明確にしながらも、彼は決して口に出さないことがある。

「【 】になる条件は、どんなものなの？」

「それは、君自身で見つけたまえ」

　ずばりと聞いた質問に、答えは返らなかった。軽妙なほどに答え続けていた男が、ひやりとした拒絶を示す。

「私はかつて、三つの身分にかかわらず人を集めて、情報を収集した。君は君のやり方で知るといい」

　それ以上は語るつもりはないようだ。メノウは無言で いた。

「君は、アカリ君のために聖地に侵入してきたわけだ」

「ええ」

「世界を回帰し続けた【時】の純粋概念、トキトウ・アカリを──殺すために」

「そうよ」

　メノウは頷く。

　アカリを殺す。 になる前に、アカリがアカリでなくなる前に、自分の手で。

　処刑人であるメノウがアカリのためにできることは、それしかない。

「そこが不思議だね。手の届く場所まできたんだ。助けよう、とは思わないのかね。友達なんだろう？」

「失礼を承知で逆に聞くけれども、どうすれば助けることになるの？」

　アカリを助ける。もしかしたら、不可能ではないのかもしれない。無許可でアカリを殺すにしても、 『 』の監視をくぐり抜けなければならない。難易度は上がるが、手段としては変わらないのだ。

　だからメノウは、妥協でアカリを殺すわけではない。

「異世界人を助ける方法なんて、ないじゃない」

　一時だけ命を助けても意味がない。 になれば被害が出る。生きていれば記憶がなくなり、トキトウ・アカリという人格が失われる。

　なによりも、メノウ自身が許せない。

　自分の感情のためにアカリを助けるなど、無意味だ。

「意外とね、なんとかなるものだよ」

　やわらかく んだ。

「ここに来るまでに話したが、君の師匠である『 』も異世界人を助けようとして尽力した過去がある」

「おかげさまで、あなたの言葉を信じていいものか、ずっと悩む羽目になったわ」

「ははっ、よくわかるよ。『 』は素直じゃないからね」

　素直であるないの問題ではない。軽快に笑った『盟主』にメノウは半眼を向ける。

　過去に『盟主』と『 』の間に因縁があったのは疑いようもない事実である。だがそれが盟友関係だったとは思えない。

「『 』がほだされるほどに、魅力的な女性だったよ。思わず、年甲斐もなく私がアプローチをかけてしまうほど光り輝くほどの魂を持つ女性だった」

「……それは、気の毒に」

『盟主』に同情を寄せたのではない。こんなおっさんに言い寄られた見ず知らずの女性に が いた。

「最終的には『 』が殺してしまったがね。残念 まりない。あの時、私には彼女の心がまったく理解できなかったが……意外と、いまの君と同じようなものだったかもしれないね」

「……そう」

「私が知っているだけでも、彼女は常に自分の大切な人間を自ら殺してきた。その度に強くなり、完成された処刑人となったんだ」

　彼にはこれからなにが起こるのか、わかっているかのようだ。

「これから始まるのは、そういうことだ。君が『 』に勝って彼女のような処刑人になるのか、『 』が君に勝ってますます処刑人として磨きをかけるのか。私は君が、九割方死ぬと思っている。なぜだかわかるかい？」

「私が に勝てないから」

「正解だ」

　小気味よく頷いた。彼は に置いてあるステッキを持ち上げ、メノウに向ける。

「私が見るところ、君が『 』よりも弱いということはなかろう。白兵戦での実力は大きくは変わらないが、若い分、全盛期を過ぎた彼女よりは優っている要素も多いはずだ」

「そう。光栄だわ」

「でも、勝てないだろうね」

　そうだ。

　それでも、勝てないのだ。

　なぜかなど、言われるまでもない。ただの力の過多で に勝る者などありふれている。メノウ自身、自分より強い相手に勝利をつかんだことが何度もある。力の大小で有利不利を考えることはあっても、勝敗を決めつけたことなどない。

「君は優秀だよ、メノウ君。大司教オーウェル卿に、『 』の小指。ただの神官ならば押しつぶされるしかないほどの難敵を押しのけて生き残ってきた。けれども君の師匠は、君と致命的に が悪い」

「……」

「彼女は君の判断力をよく知っている。本来ならば君の利点となるはずの部分が、逆に になってしまう。それがどれだけ致命的なことか、わからない君ではなかろう」

　メノウの最大の長所は、トラブルに直面した時の対応能力だ。逃げるにしても戦うにしても目的達成のための手段を構築できる。

　 に わないという最大の理由は、メノウ自身がまるで勝てる気がしていないというメンタル面だ。彼女を敵に回すだけでメノウの選択肢が縛られる。

　そんなことは承知の上で、聖地に侵入することを選んだ。

「だから、どうしろと？」

「逃げてしまえ」

　ここまでメノウを連れてきておきながら、そんなことをうそぶく。

　バカバカしい。聞くだけ無駄だった。メノウは立ちあがる。

「おや、どこへ行くんだい？」

「散歩がてらの偵察よ」

　聖地に来る前に、仕込みは済ませてある。事前に仕掛けた が進めば、遠からず聖地には騒動が起こる。その際に内部のことを知っていなければ動けない。

「ほう」

　 れた吐息に隠しきれない興味の色が混ざる。

「トキトウ・アカリの居場所をかい？　彼女も、実にかわいらしい少女だったね。いつか私に紹介してくれないかな？　彼女は『迷い人』にしても、非常に興味深い立場にいる」

「いいえ」

　首を横に振る。

　探すまでもなく、アカリの居場所は知れている。大聖堂に来た時にメノウたちを出迎えた、眼鏡の神官フーズヤードが話していた内容。北塔が使用中というのはアカリを監禁しているからに違いなかった。

　メノウがアカリを殺しにくることを は悟っているはずだ。最悪、 がぴったりと張り付いている恐れすらある。そもそも大聖堂に入り込めたものの、ここから脱出する目途は立っていない。

　だからこそ、いまは に手を出せない。

　純粋概念【時】の魔導、【回帰】で死ぬ前に己の時間を戻すことができるアカリは、不死身といっても過言ではない。 がアカリを殺すとすれば、どうするか。彼女がとる手段は聖地にアカリを連れて来たことからも明らかだ。

　 は『塩の剣』を使ってアカリを殺すつもりだ。

　メノウは幼少の頃に、 に連れられて塩の大地に行ったことがある。だからこそ『塩の剣』のある場所への行きかたを知っている。

『龍門』。

　メノウたちが乗ってきた導力列車が通り抜けた光の扉は、またの名を転移魔導陣と呼称されている。導力の道あるところに【転移】を可能とする古代遺物を使い、聖地から塩の大地までの距離をつなげて飛ばす。

　眼鏡の神官フーズヤードの管理している【転移】の用意がどうなっているのか探るのが、第一段階だ。

　ぱさり、と布がたたまれる音がした。

　メノウがカガルマの協力を得て聖地に入った頃。遠く離れた山間の温泉地で、二人の少女が旅館の脱衣所にいた。

　少し前にメノウのもとから逃げ出したモモとアカリが宿泊したことで、いろいろと小さな騒動が起こった旅館である。そのせいでお客がぐっと減り、彼女たちは半ば貸し切りで宿泊をしている。

　片方は修道服、もう一人は着物姿という統一性のない格好をしている年頃の少女たちだ。特に着物を着た少女には、ふとした指先の仕草に育ちのよさがにじみ出ていた。

　マノン・リベール。

　大陸最大の禁忌『 』とともに行動をしている恐るべき少女だ。 のない三つ編みをほどいた彼女は、着物の帯をたたんで肩をはだけようというところで手をためらわせる。

　マノンにとっていま脱衣所にいる少女は、せっかく手に入れた同世代の友達候補である。数日宿を共にしていたから、いい機会だし親睦を深めるべく勇気を出して一緒の入浴に誘った。

　しかしマノンは肉親を除いて誰かと一緒に入浴するというのが初だった。

「ええと、なんといいますか」

　 に着物を着崩したマノンは、てれっと を赤らめる。

「照れますね、こういうのは」

　育ちのいいマノンは大衆浴場などに通ったことはない。生まれも育ちもお嬢さま暮らしの だったため、同性とはいえ他人に肌を すことに があった。倫理観のねじが外れているマノンだが、そこら辺の感性は人並みの乙女なのだ。

「そう？」

　羞恥に頰を染めるマノンとは対照的に、てきぱきと自分の修道服を脱ぎ終えていた少女には照れも恥じらいもない。

　ゆるやかにウェーブした銀髪を持つ、眠たげな目元をした少女だ。涼しげな のある美少女が下着姿になっているというのに、なによりも人目をひくのは右肩口から先だった。

　銀色に輝く導力義肢。

　導力と精神を接続することで体と遜色のない動きを可能とした義肢技術だ。彼女のそれは人がつくったものではなく、四大 『絡繰り世』に与えられたものだ。

　東部未開拓領域『絡繰り世』で禁忌に ちた修道女、サハラ。

　義腕を生身と なく動かして下着を脱ぎ、脱衣かごに投入。

「修道院は集団生活だったから、私にとっては普通」

　マノンとサハラ。どちらも禁忌に手を出した、メノウと因縁浅からぬ少女たちである。彼女たちは図太いことに、メノウたちと一戦をかわした後ものほほんと山間の温泉街に滞在を続けていた。

「早く。私は早くお に入りたい」

　脱衣の手が止まっているマノンへ、サハラは自分の義腕を伸ばしてさっさと脱げと袖を引っ張る。親愛というよりは行儀の悪いサハラの行為に、平素おっとりしているマノンは慌てて に手を寄せる。

「じ、自分で脱ぎますので！　お手伝いは結構ですっ」

「そう？　じゃあ、お先に」

　嫌がるならばと無理強いはせず、恥じらうマノンから手を放す。マノンはほっと息を吐いていたが、その実サハラはマノンの反応がよかったのでお風呂の中ではさらにからかおうと表情を変えずに決めていた。

　露天風呂に向かったサハラを出迎えたのは、肌を でる外気だ。景色が見える解放感と、もうもうと湯気を上げる源泉かけ流しの温泉に満足げに頷く。

「さすが、高級旅館」

　こんな贅沢は修道女ではできなかったなと、集団生活者特有の手早さで体を洗ったサハラはお湯に肩までつかる。

　じんわりと全身に染みるぬくもり。ほふうと息を緩めて体をほぐしていると、少し遅れてマノンが入ってきた。他人がいることに慣れていないのか、体にバスタオルを当てている彼女の表情は少し固い。

　彼女はお湯につかっているサハラを見て、ふと不安そうな表情を浮かべた。

「サハラさん……右腕、 びたりしません？」

「錆びない」

　無用な心配に、お湯をかき上げながら導力義肢となっている銀色の右腕を動かす。

「厳密にはこれ、金属じゃないし。腐食自体しないわ」

「そうなんですか？」

　お湯べりに近寄ったマノンは、物珍しそうにサハラの義腕をつんつんとつつく。

　サハラの右腕が導力で精神接続をした義腕となっているのは、『 』と並ぶ 『絡繰り世』が失った部位を補てんして寄生した結果だ。世界を単純化して分解、三つの色で再構成する原色概念。その根源である三原色の輝石は、呼吸する鉱石といわれるほどに生物的だ。

　自分と関係のある といえばと、サハラはもう一つを思い出す。

「……そういえば、 は？」

「あの子は、ちょいちょいどこかへいなくなるんです。呼べば来てくれるので、不在の時もあまり気にしていませんでした。呼びましょうか？」

「あ、いい。別に話したくはない」

『 』。

　異世界人の成れの果て。かつては人も文化もあった南端諸島を食い尽くし、世界に癒えぬ傷跡を残し続ける四大 の一つ。

　この世に る魔物の源泉であり、幼女の形をしたおぞましき化け物だ。

　彼女については、マノンの言葉通り居場所にこだわる必要はないのだろう。純粋概念【魔】の代弁者である彼女は、異界とつながる召喚で距離を無視できる存在だ。歩いて旅をする必要がない。サハラは幼女の形をした怪物に恐れを抱いているので、いないほうがありがたかった。

「なら『盟主』は？　あの人も見当たらないけど、どうしたの」

「え？　ああ、そういえばいませんね」

　見なくなって数日経っているのだが、いままで気がついていなかったらしい。マノンは桶で温泉のお湯を んで体を洗い始めながら、しみじみと。

「いないほうがいいので、特に気にしていませんでした。サハラさんも、あの人とは わり合いにならないほうがいいと思いますよ。ちょっと距離感が変な人なので」

　ひどい言いざまである。

　少し話しただけのサハラでも微妙に言動が気持ち悪いと感じたので、マノンの気持ちはわからないでもないが、ならばなんで脱獄させたのだろうか。

　疑問を抱きつつも、深く追求するほど彼に興味がなかった。

「ああ、でも、そういえば……」

「ん、どうしたの？」

「いえ……大したことではないんです」

　ついっと唇に指を当てたのは、考えこむ時のマノンの癖だ。彼女はおっとりとした面立ちを困らせて、とある心当たりを吐露する。

「数日前から替えの着物が一着、見当たらなくて」

「……」

　サハラは、そっと目を閉じた。

　なくなった美少女の着替え。いなくなったおっさんの『盟主』。両者の行方が知れなくなった時期は一致する。

　答えは一つである。サハラはカッと目を見開き、力強い声を出す。

「マノン。『盟主』を殺すときは声をかけて。私も全力を尽くす」

「わかりました。その時は、ぜひ！」

　乙女が二人、手を握り合った。共通の敵の発生は、仲間意識を強固なものとする。

「とはいえ……ふふっ。さすがに、本気で『盟主』さんが盗んだとは思っていませんけどね」

「そう？　やりかねないと思うけど」

「まあ、確かにやりかねませんけど……タイミングを考えると、メノウさんですね、これは」

　メノウ。

　マノンの口から出た名前に、サハラは無意識に自分の左手で自分の義腕を撫でる。

「……メノウは追わなくていいの？　あいつ、アカリちゃんを追っていく気なんでしょう」

「それなのですけど、実はメノウさんとは関係なく聖地には向かう予定でした。この街で会った時に情報を差し上げて きつけていたのもメノウさんに聖地で動いてもらうためだったんですけど……丁度いいので、あの子が戻り次第、メノウさんに合わせて行動しようと思います」

「ふうん？」

　あの子というのは『 』のことだろう。マノンはマノンで、なにやら陰謀を張り巡らせているらしい。逆にサハラは直情型だ。マノンの考えは読めずとも、嫌な感じはしなかったのでいいかと納得する。

「マノンはどうして と一緒にいられるの？」

「どうして、といいますと……楽しいからですけど」

「……へえ」

　負の感情がにじみ出ないように、サハラは慎重に声を吐き出す。

　お風呂で同性に肌を見せるのには恥じらいを持ちながらも、屍を積み上げ続ける と行動するのが『楽しいから』と言い切る。きょとんとした顔で答えるマノンの感性がねじれているのはサハラにもよくわかった。 と一緒にいて心の底から楽しいと言い切れる精神性は、唯一無二だろう。

　それならばと質問を変える。

「リベールの町でのことは聞かせてもらったけど、あなたの考えがよくわからない」

「故郷でのことですか。手並みが雑で、恥ずかしい限りです」

　生まれた町に依存性のある人を魔物にする魔薬をばらまき、挙句の果てに血縁を に げて の存在を原罪概念に置き換えて悪魔となった。聞くだにおぞましい所業を指摘されて、本当に恥ずかしげに桶で口元を隠すのだから始末に負えない。

「手並みがどうというより……動機がわからない」

　この世に混沌を。

　この世に を。

　それは原罪概念の申し子として になった の思考だ。マノンのものではない。

「あなたは、どうして異世界に行きたいの？」

「ああ、そのことですか。厳密にいうと異世界に行きたいというよりは……取り戻したいものが、きっとそこにあるんですよ」

　この世界で生まれたはずのマノンは、湯煙にまぎれそうなほど淡く微笑んだ。

「何度も、何度も何度も、よく聞かされたんです。母から、よくよく、聞いていたんです。わたくしの、年下のお姉ちゃんのことを」

「年下の、姉？」

「はい」

　マノンは多くは答えずに微笑む。

　 を連れて旅をしている理由。小さな怪物のために動いているわけ。

「わたくしという人格の根幹は、そこにしかないんです」

　誰もが忘れてしまい、 すらとっくの昔に削りきって覚えていない昔話を知っているからこそ、マノン・リベールはここにいる。

　複雑怪奇なマノンの事情をサハラが知っているはずもない。

　知る必要もないと、マノンは必要以上に語らない。

「そういうサハラさんは、どうしてまた『絡繰り世』に？　東部未開拓領域には志願されたと聞きました。そこでゲノム・クトゥルワと出会って、禁忌になったと」

「むしゃくしゃしてやった。後悔はしてない」

「わかります。そういう時が、ありますよね」

　衝動的に禁忌に手を染めた少女二人は割とどうしようもない行動原理で共感を深める。

　体を洗い終えたマノンがちゃぷりと湯船につかる。距離の詰め方に戸惑っているのを見て、サハラは足を伸ばして を突いてみた。マノンはくすぐったそうにしつつも拒否をしない。

「ふふっ、でも一度、東部未開拓領域には行ってみたいんですよね。『絡繰り世』の中には、ある程度、人間にも友好的なところもあるんですよね」

「一区と三区の前線を避ければ、まあ。十三地区のなかでも八区の器械樹街のあたりとかなら精神汚染もなかったはずだし、導力銃も大半はそこらへんで──」

　裸の付き合いでマノンとサハラが情報交換と友情を深めている時、ざぶんとお湯が揺れた。

　一体なんだと二人の視線が波の発生源へと集中する。

「ぷはぁっ！」

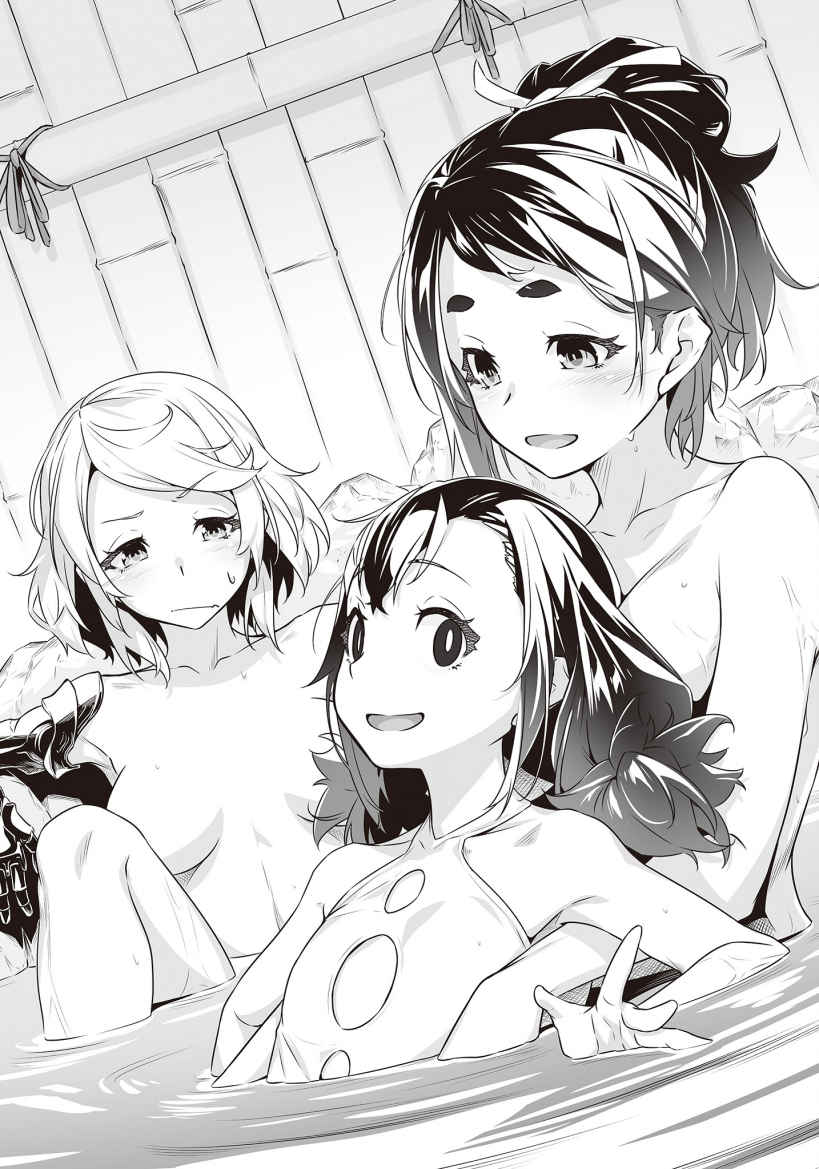
　大きな呼吸音を響かせたのは、白いワンピースを着た十にもなっていない幼い少女だ。歳の割には上品に整った顔つき。胸元に三つの穴が開いた服を着たままの彼女は、黒髪をびしょぬれにしながら満面の笑みを向ける。

「まあまあのお湯ね。ご機嫌かしら、マノン」

　 。

　サハラは前触れのない登場に硬直する。どうやって現れたのか、明らかにお湯の中から と出現した。

　マノンは驚いた様子もなく、めっと の鼻に人差し指を当てる。



「ダメですよ。服を着たまま湯船につかるなんて、お行儀が悪いです」

「まあ、そうかしら？」

「お湯が汚れてしまいますからね。湯船にはちゃんと にしてから入るのが礼儀です」

「あたしが生まれる度に新品になるから、この服はとってもきれいよ？　なら、まあいっかって思わない？」

「……反論できませんね」

　湯浴み着の文化もある。一概に服を着てお湯に入るなとは言えないと、顔を困らせる。

　二人のやりとりをサハラは不思議な面持ちで見つめる。

　世界の誰もが恐れる 。人を食い散らかす魔物の原初が『 』だ。マノンだけは徹頭徹尾、この小さな怪物に対して幼子として接している。

　親愛の情が、どこから来るのか。

　誰かに優しくしたいという気持ちが、サハラにはそもそもよくわからない。サハラにとって他人とは蹴落とす対象であり、引き下ろすべき存在だ。

「これからの予定を聞いてないけど、なにをするつもり？」

「ああ、伝え忘れていました。サハラさんにも協力してもらいますのに」

　協力するかどうかは話を聞いてからだ。いざとなればバックレる勇気を持つサハラに、マノンは胸元に小さな怪物を抱き寄せて上品な微笑みを送る。

「この子と一緒に、聖地攻めを決行します」

「なるほど」

　これは、発想が常人とは違う。 を見て逃げるべきだ。

　やはりこの子には付き合っていられないかもと、サハラは真剣に逃亡方法を した。

　修道院で宿泊した翌日。

　聖地を訪れたモモは、報告の手続きのために教会施設の一つを訪れていた。

　周辺にある修道院の管理をしている部署だ。そこでモモの出身である修道院を管理している と接触をしようと思ったのだが、連絡が取れないらしい。

　どうも、数カ月前に管理している修道院を出立してからまったく連絡をとっていないらしい。係の神官に、所在がわかったら報告してくれと逆に頼まれてしまう始末だ。

「……まー、あの人はそういう人ですけど」

　やはり素直にしてくれない。空振りに終わったモモは愚痴と諦めを半々に呟く。

　メノウと別行動をしているうちにできるだけ とトキトウ・アカリの情報を集めたいのだが、どちらも影もつかめないほど姿が見えない。聖地にそんな人物はいませんよと報告したほうがよほど簡単な状況である。

「まさか、大聖堂の中にいるとかですかねぇ」

　モモの立場で入れない施設は多いが、もっとも堅牢な場所がそこだ。聖地のシンボルである大聖堂は、 の中でも入れる人間が限られている。 でも役職的には入る権限はないはずなのだが、そこは『 』である。なにか裏技を使って入っていておかしくない。

　どうしようかと思案しながら手続きを終えて出ると、当然のようにアーシュナが待っていた。

　宿泊した修道院から聖地にまで付いてきた彼女だが、 にしている。

「……ひたすらに綺麗なだけの町だな。他に感想がないほどだ」

「姫ちゃまは聖地をなんだと思っているんですか？」

　合流するなりアーシュナがぼやく。不満たらたらのご様子だが、 の集う聖地に娯楽を求めること自体が間違っている。

　景観こそ美しいが、この街には人を楽しませて歓迎するという意図は ない。

　特産品を扱う土産の屋台もなければ、飲めや騒げやの飲食店もない。歴史や成り立ちを解説してくれるツアーの案内人も皆無だ。聖地は一辺五百メートルもないほどに狭い上に、立ち入り禁止区域も多いため、半日もぶらつけば景観を楽しむ場所すら尽きるという徹底ぶりである。

　 の住人がいないということは、経済も流通もないことと同義だ。 しかいない聖地では娯楽はほとんど排されている。金銭を使う機会がないほどに、誰かのためになにかをする仕組みがなかった。

「よく の連中はこんな町で暮らせるな。神経がわからん」

　生まれも育ちも の王族。暮らしぶりが根っから贅沢でスリルを求める気質のアーシュナにとってはたまったものではないのだろう。まだ半日もいないというのに、 みのなさにさっそくぼやいている。

　実際問題、よほど な 以外はあまりにもやることがなさすぎるために聖地に寄りつかないという面もある。

　当初こそ、『聖地はなにかを隠している結界だ』という持論の補強となるようなものはないかと熱心に街を見ていたアーシュナだったが、驚くほどにほころびがなかった。付け込む余地なく魔導的に完成されている街を前にして、自信満々だった姫騎士の も探る場所を失ったらしい。

　残ったのが、やる気の矛先を失ったやさぐれ姫である。

「しかし……ああ、暇だ。路地裏に入れば暴漢でも んでこないか？」

「くるわけないでしょーが。姫ちゃまは、ほんっとーに聖地をなんだと思ってるんですか」

　大陸的に見ても聖地の治安のよさは突出している。なにせ住民の全員が なのだ。外来者の巡礼者にしたって未開拓領域を踏破して聖地に参拝するほど な者ばかりである。アーシュナが望むような騒動など起こるはずもない。

「しかしなぁ、モモ」

　旅の不便は笑って受けながすアーシュナも退屈には耐えかねるらしい。ぶちぶちと文句を垂れる。

「 の総本山というから期待したのに、ここまでなにもないとは思わないだろう！　陰謀の一つや二つ用意して るべきだ！　実際、遠望した時には明らかな怪しさに満ちていたのに、中に入ってみればここまで無味無臭とは……！　探るべき腹がどこかもわからないとは、アーシュナ・グリザリカの名折れだッ」

「うるっさいですね、姫ちゃまは。こっちも当てが外れたところなんですよ」

「当て？」

「……なんでもないです」

　口が滑った。暇が極まって飢えている相手の興味を引いてしまったことに後悔しつつも、雑にごまかす。

　モモもただ単純に聖地に戻ってきたわけではない。別行動で潜入しているメノウをサポートするために の居場所をつかもうとしていたが、自分たちの師匠である『 』は影も形も見当たらない。なんだかんだ理由をつけて の周りをうろちょろして、あわよくばアカリの監禁場所にあたりを付けるつもりだったのに、手掛かりすらないのだ。

　いまのところ は完全に をくらませている。これではトキトウ・アカリのいる場所が不明なままだ。

　だが、無為に過ごすわけにはいかない。

「……大聖堂が怪しいとは思うんですけどねー。入りかたがわからないんですよね、あそこ」

「わかるぞ、モモ。やはり大聖堂か。強度を確認するために、まずは正面扉を試し斬りでもするか？」

「しません。したら、私は即座に周囲の神官と協力してお前を取り押さえますから」

　アーシュナの暇が極まっているせいか、言動がかなり怪しくなっている。

　穏当なモモの意見を聞いて、不満そうに をひそめる。

「しかしなぁ。聖地の隠し事は、間違いなくあの中にあるぞ。一般に開放していない場所には、必ずやましいものがあるものだ」

「別に私は聖地の秘密を きにきたんじゃないんですよぉ……！」

　いっそここで姫ちゃまに殴りかかって一騒動起こしてやれば責任者として を引っ張りだせないかと、モモはモモで生産性が もないことを思案し始めた時、向かい側から、一人の男が歩いてきた。

　住民のすべてが のみで構成されている町では、男だというだけで目立つ。

　巡礼者なのだろう。帯剣をしていることから、騎士だということはわかる。覇気のない顔つきに中肉中背の特徴のない姿よりも、珍しい造りの武器に視線が引き寄せられた。

　刀。

　あまり使う人間がいない武器だ。高度な製法が紋章魔導を組み込むのと相性が悪いため、帯剣が許されている騎士たちからも敬遠されている。

　なんの気なしに目で追った男性騎士とすれ違ってから、横にアーシュナがいないことに気がついた。

　アーシュナが立ち止まっていた。

　尋常ではない様子だった。 という表現がぴったりはまる。

「姫ちゃま？」

　異変に気がついたモモが声をかけても反応はない。視線は をさまよい、あらゆる動作が停止して固まっている。先ほどまでと比べて、劇的な変化だ。

「……バカな。なぜ、ここに」

　無意識だろう独白には、 と絶望。そして隠しきれぬ と恐怖があった。

　アーシュナの視線が、ふらりと揺らめく。いまある目の前の事象のすべてがアーシュナの頭から消し飛んでいた。彼女の が、先ほどすれ違った男を追おうとして──

「さっきから無視とはいい度胸ですね」

「──んぐッ!? 」

　モモに頰を引っ張られた痛みで我に返る。修道院に来訪した時と同じく、モモが指でつまんでアーシュナのほっぺたを伸ばしていた。

「も、モモか」

「そーですよ。で、姫ちゃまはどうしたんですか」

　思考のこわばりがほどけ、自分の立っている場所を思い出す。

　なにかを言うために口を開きかけて、言葉を み むために口を閉じる。アーシュナが浮かべているのは の表情だ。

　珍しいとモモは瞬きをする。即断即決がアーシュナの生きざまの一つである。行動にしても思考にしても彼女の動きにラグが出ることは だ。少なくともモモはアーシュナの を初めて見た。

　数秒のためらいの末にアーシュナが出した答えは『巻き込めない』だった。

「モモ……悪いが、別々に行動しよう」

「悪いどころか普通に しいので、どうぞ」

　モモには止める理由もない。そもそもいま一緒にいるのだって、アーシュナに付きまとわれたからだ。無視されたのがムカついたので気付けに頰をつまんだが、深い意味などない。

　モモの了承に、アーシュナが を返す。彼女が速足で向かう先は、いますれ違った男性騎士の背中だった。

「知り合いだったっぽいですね」

　そのくらいしか思いつく理由はなかったが、 するほどの興味も湧かない。通りの曲がり角に消えたアーシュナを見送ったモモは再度、自分の行動指針を立てるための思索に沈む。

　居場所もわからない相手に動きがないと、本格的に動けない。さて、これからどうしようかと頭を悩ませていた時だ。

「ああ、ここにいらっしゃったのですね」

　道端でたたずんでいると修道女が声をかけてきた。宿泊していた修道院に在籍していた一人だ。モモを探していたらしく、息を切らしている。

「なんですか？」

　放っておいても夕方には戻る予定だ。なにを慌てているのか しんでいると、彼女は予想外のことを言い放った。

「モモさんのことを大司教がお呼びです」

「……はい？」

　大司教。

　それは聖地において事実上の最高責任者だ。思った以上の大物の呼び出しに、固まる。

　聖地にいる役職持ちでモモに関係あるとすれば 『 』だけである。

　それがなんの脈絡もなく大司教の呼び出しとなるとモモの理解を超えている。聖地の大司教といえば、 の頂点といっても過言ではない大陸屈指の人物だ。

「どうして、大司教が？　聖地の大司教って、エルカミ卿ですよね？　私、別に知り合いでもないですし……ただの白服ですよ？」

「理由は知らされておりません。それでも、間違いなくモモさんをお呼びです」

　一応、モモは休暇の名目で聖地に帰ってきた。 は上官であるメノウの命令でということになっている。

　だから呼び出されるいわれなどないのだが、伝言を仰せつかった修道女はモモの手を引いて懇願する。

「お願いですから、早く大聖堂に向かってください」

　アーシュナは小走りで先ほどすれ違った人物を追っていた。

　この白い町に、騎士で男となれば探すまでもなく目立つ。事実、その男は隠れることもなく歩いていた。アーシュナは追いついた男の肩をつかんで引き寄せる。

　振り返ったのは、虚ろな目つきの男だった。歳は三十半ばほど。特別体格に優れているわけでもない、中肉中背の男性だ。

　見るからに覇気のない男に、しかしアーシュナは渾身の警戒心を込めて問いかける。

「なぜここにいる、エクスぺリオン」

　エクスペリオン・リバース。

　並みいる神官、 る禁忌、 える『迷い人』を差し置いて、大陸に う者なしと いあげられた騎士だ。

　グリザリカの騎士である彼のことはよく知っている。アーシュナが剣をとったきっかけは、ほかならぬ彼の剣技を見たからだ。

　同時に、忌々しいことに彼はアーシュナの姉の手先でもある。

　剣しか取り柄がない彼が、聖地に来る理由がわからない。

　彼にはこれっぽっちも信仰心はない。ただ強くなり、中身がなくなるほど強くなった。

「迎えに行けと言われた」

「……私が従うと思うか」

　アーシュナは大剣の柄に手をかける。

　十の紋章剣。グリザリカ王家に代々伝わる王剣は、 の技術の結晶だ。

　全力で振るえば、あるいは。

　刃を届かせるべく、アーシュナは戦意を研ぐ。

　エクスぺリオンは、アーシュナを殺さない。優位性があるのだ。

　アーシュナの殺気を前に、エクスぺリオンは困惑したように首を振る。

「姫を迎えろとは言われていない」

「なに？」

　では、誰を。

　彼が を言うとは露ほども思わない。

　自分の意思を捨てて、他人の言うことしか聞かない。

　剣であるために、自分の意思を捨てた『最強』。

　彼は正真正銘、アーシュナの姉の だった。

「……誰をだ」

「それは言うなと言われている」

　なぜとエクスぺリオンに問う意味はない。彼は命令した者の目的など知らない。

　やれと言われた。

　だからやる。

　彼にそれ以外の意思はない。

　だからエクスぺリオンは命令通りに誰かを迎えにきたのだろう。

　剣であるがために、動き続けている。言われなければ、寝食すら忘れてそのうち餓死をする。エクスぺリオンという人間は、人としては決定的に欠落していた。

　アーシュナは大剣を抜いた。

　抜き身の大剣を携えるアーシュナを見ても、彼の にはいささかの緊張も生じていなかった。

　力なく、虚ろで、覇気はない。だが彼の肉体には、技が残っている。

「姫は るなと言われている」

「知っている」

　遠く、大陸の西方にまで姉の手が伸びてきた。それがたまらなく、アーシュナの嫌悪感を募らせる。

「ただ、こう言えとは言われている」

　抜刀。

　流麗な動きに、アーシュナは思わず れてしまった。

　意思がなくとも──エクスぺリオン・リバースの強さは、強さを標榜するアーシュナにとって毒になるほど美しい。

「『強さの信者ならば、強者に従え』」

　大陸一の強者から、 いがたい姉の言葉が伝えられた。

　聖地の中心にある大聖堂は一般開放などされていない。 でも入れる人間はごく限られている場所だ。

　そんな大聖堂の正面玄関前で、モモは自分を呼び出した人物と対面していた。

「お前が神官補佐、モモか」

「……はぁーい、モモでーす」

　大司教エルカミ。

　 の最高位に恥じることのない魔導行使者として大陸に広く知られる人物だ。

　モモの知るなかでは、古都ガルムに赴任してグリザリカ王国の教区を取りまとめたオーウェルと同格か、任じられている場所を考えればそれ以上かもしれない。

　初めて面会した彼女は、背筋のしゃんとした老婆だった。老いてしわがれた両手で、教典を胸に抱いている。肉体は年相応に老いながらも声には活力があふれており、 とした雰囲気を伝えていた。

　あからさまに んだモモの返答に、ぴくりとエルカミの目元が動く。

　表情を隠さない性格なのかと、心の中でメモをする。

「お前の上官である『 』メノウはどこにいる」

「先輩なら、禁忌の被害にあった町の復興に行きましたぁ。 『 』に命令されたそーです。今回の任務は処刑人の役目とは関係ないので、補佐官である私だけ一時的に聖地に帰らせられましたー」

　詰問されているモモに緊張感はない。完全に めきった口調のまま応答する。

「お前の教育者は……ちっ。お前の世代で処刑人の系譜なら、『 』か」

「そーでぇす。もし私の態度に問題があったらぁ。それはぜーんぶ私を教育した の責任でーすぅ。よろしければ 『 』を監督責任不行き届きの で してくださぁーい」

「神官補佐モモ」

「はぁーい」

　 の頂点を前にして、まさしく神も れぬ態度をとるモモに命令が告げられる。

「お前を私の直属に配置する」

「……はい？」

　本日何度目の驚きか。きょとん、と目を瞬く。

　大司教の直属。とっさに言われた台詞の意味をつかみかねた。

「『 』といい、その弟子といい、アーシュナ・グリザリカといい、なにを んでいるかは知らん。だがいまは、大陸全土に関わる重大事項が進んでいる。万が一にも、その邪魔をされてはかなわん」

「えぇ？」

　メノウとならば のつもりだが、 やアーシュナとひとくくりにされるのは、とても納得がいかない。思わず不満の声が出る。

　それをどうとらえたのか、ぎろりとにらみつける。

「拒否は許さん」

「許さんって……」

「貴様の上官である『 』が引き取りにくるまでは、上役を付けて雑務を任じる」

「……はいはぁーい。わーかりましたぁ」

「付いてこい。大聖堂の中に入る」

　言うなりエルカミは踵を返す。命令することに慣れている、有無を言わせない言動だ。

「大聖堂の、中に？」

「ああ、しばらく出ることもできないと思え。ことが終わるまでは、監視下に置く」

　彼女を追いながら、状況を整理する。

　エルカミがわざわざモモを呼び出してこんな詰問をしたくらいだ。少なくとも目の前にいる大司教にはメノウの動きが捕捉されていないと考えて間違いない。

　だが同時に、メノウの動きが疑われている。

　アカリを追うメノウに ならばともかく、なぜ大司教までもが動いているのか。モモは頭を回転させる。

　異世界人とはいっても、年に二、三人は必ず召喚される。人為的なものもあるし、自然召喚もある。たかが異世界人一人に、大司教ともあろう者が直々に動くのも不自然だ。

　理由があるならば、そこも探る必要があるかもしれない。

　大聖堂に入れば、いままで知ることができなかった内部の間取りもわかるしアカリの居場所もつかめるかもしれない。メノウと直接的な協力をすることも可能になるだろう。

　なにより、いざという時に助けになる行動をとれる。 の居場所が捕捉もできていない現状、聖地を統括する人物の傍にいられるのは悪いことではない。

　とはいえすでに大司教から警戒されているという事実は無視できない。 も、まさかメノウが命令通りに関係ない町の復興作業に従事しているとは思っていないだろう。

「ところで はいまどこにいるんですか？　帰った をしようと思ったんですけど、見当たらなくて。大司教ならご存じですよね」

「はっ、 の行動など知ったことか。集団行動ができないクズだぞ」

　大司教すら知らないとなると、本格的な警戒態勢をとっているようだ。

　目に見えない の動きを想像しながら、エルカミの背中について大聖堂に足を踏み入れた。

　全霊をかけて、全力を尽くす。

　 に連れて行かれたアカリを追いかけると決めた時、メノウはその自分のスタンスをぎゅうっと心に固めた。

　自分がやろうとしていることの困難さを、メノウはよくよく承知している。

　 『 』は、アカリを殺さないようにしている節があった。明確な意図があって時間回帰を繰り返させて、アカリの記憶を消費させている。アカリを 化させることが目的であるような挙動をとっていた。

　その疑問はカガルマとの会話で氷解した。

　純粋概念は本来ならば異世界人の魂に内包されている。精神を削り、魂を損なわせることで として暴走させ、アカリの魂に定着した【時】の概念を時間魔導として世界に遍在させるのが の行動原理だ。

　だからメノウは、アカリがアカリのままでいるうちに、己の手で彼女を殺す。

　最大の障害は 『 』だ。メノウの育て親であり、師であり、誰よりも優れた処刑人である彼女は、明らかになんらかの目的を持ってアカリを連れ去った。

「アカリを殺すなら、 だって『塩の剣』を使うはず……」

　メノウがアカリを殺すための手段と重なる。どうあがいても との戦闘は避けて通れない。

　だから、自分のすべてを賭けて挑む。

　 『 』を超えるなど、普通の感覚では不可能だ。なにせ時間を繰り返していたアカリ曰く、メノウが の裏をかいた成功例は皆無だという。

　それを知って挑むなど、バカげている。自分の愚かさを承知の上だからこそ、余力など残していられない。全力で、肉体も、精神も、魂も尽くして行動するのだ。

　南塔の階段を、メノウはゆっくりと降りていく。 一つ見逃さない注意深さで、ネズミの足音すらも聞き逃さない用心さで、メノウが持てる最大限の警戒態勢を張り続ける。

　マノンの顔を張り付けた導力迷彩の仮面の下で、メノウは微笑んでいた。透き通って美しい、けれども見る者がもしいたのならば、背筋を凍らせるほどの さを含めた笑みだ。

「……」

　大聖堂の内部は、驚くほど人がいなかった。

【 】の称号を得たものが大陸情勢の意思決定機関であることは間違いないらしい。

　 の表立った権力は三つ。

　善悪を裁く司法権、大陸共通通貨発行権、教会を通した思想教育。

　 の上に立つことができるのならば絶大な力を得ることができる。個人の魔導など問題にならない力だ。【 】を敵に回すとしたら、大陸の仕組みそのものを敵にすることになる。

　カガルマ・ダルタロスは、かつて【 】の暗躍が許せなかった。

「でも……結局は、 した」

　身分なく、暗躍する支配者なく国をつくろうとした『 』思想は失敗した。まとめ役がいなくなった『 』はちりぢりになり、残りかすはちんけな犯罪集団になり果てた。

　だがメノウは大陸の権勢、国家運営など関わる気はない。

　メノウが変えようとしている運命は、もっと小さな、けれども大きい影響のある命だ。

「それさえ、できれば」

　アカリに、手を差し伸べたいと思ってしまった。

　殺すべき禁忌である異世界人へと生まれてしまった友情に対して、いかなる言い訳が介在する余地もない。メノウにとって、アカリへの友情は罪そのものだ。

　自分はかつて誓ったのだ。

　悪人になる、と。

　だから自分は、アカリを殺す。報われてはならないから、アカリを最後に処刑人としての自分を完遂する。人を殺してきた自分だから、どれだけ救われることがなくとも誰かを殺すことで決着をつける。

　すでにメノウは脱出のことを考えていない。アカリの暗殺が首尾よくいこうがいくまいが、メノウはここで死ぬのだ。

　だから気を張って、気を張って、玉砕覚悟で大聖堂まで来て。

　──それで、 に勝てるのか？

　不意に湧き上がった自問が、強烈なプレッシャーとなってメノウの心臓を り そうとする。

「──ッ」

　導力迷彩が揺らぎそうになった。メノウは慌てて制御に集中する。なんとかマノンの姿を維持したままでいられた。

　大丈夫だ。

　呼吸を整えながら、メノウは自分に言い聞かせる。

　無茶なことはわかっている。自分の分際を超えている。

　それでも、やるのだ。

　もう、あとには引けない。メノウは再び歩き始める。

　目的の場所については大聖堂に到着した時点で目星はついた。間取りも把握した。内部の人員も極端に少ない。いまのところ目にしたのは、転移陣である『龍門』を管理するフーズヤードだけだ。出入りの管理が厳重なせいか、内部に関しては隙だらけである。

　最大の問題は、やはり だ。彼女の居場所がつかめない。

　大聖堂の内部は、構造がおかしかった。

　メノウは多くの教会施設を見てきた。巨大な建造物ほど、隠し部屋の一つや二つはあるものだというのは承知している。あるいは建築時の失敗で、奇怪な間取りになることもある。

　だがこの大聖堂は、そういう問題ですらなかった。

　内部に入った時に真っ先に目につく翼廊を貫くホームだけでもおかしいが、さらに先、礼拝堂があるべき場所には進むべき道すらなかった。巨大な祭壇が壁となって、完全に廊下を塞いでいる。

「そっちには行けませんよ」

　困惑するメノウに、警告という口調でもなく駅舎にいたフーズヤードが呼びかけてくる。

「そこから先は、エルカミ大司教しか通れません。私の管轄でもないので、見学は無理です」

「そうなのですね。でしたら、おとなしく諦めます」

　導力迷彩を維持しているメノウは、マノンの口調と声色を使いながら会釈をして を返す。やはり、先があるらしい。大聖堂が結界だということを考えると、なにかを保護しているのだろう。しかも、いまメノウとフーズヤードが立っている奇妙な【転移】駅以上のなにかだ。

　くしくもアーシュナが聖地を見た時に真っ先に出した推論と同じ結論に至る。

　だが大聖堂がなにを隠しているかなど、いまのメノウには関係のないことだろうと捨て置いた。目的を定めたいま、余計なものを抱えている余裕などない。

　とりあえず、深夜にもう一度確認すればいい。元の部屋に戻るルートに足を向けた矢先だ。

　目に入った人物に、ぎくりと体が緊張する。

　聖地の中でも、とびきりの人物がいた。

　大司教、エルカミ。

　彼女の存在はメノウも知っていた。

　聖地周辺にいる で、彼女のことを知らない人間はいない。それほどに有名で、知名度に しい力を持つ大司教だ。

　彼女はマノンに化けているメノウを見て、不愉快そうに目元の を深める。

　バレては、いないはずだ。あくまでいまの自分はマノンであることを意識して、メノウはおっとりと微笑んでスルーする。穏便にすれ違おうとして、気がついた。

　エルカミの らに、モモがいた。

　二つ結びの桜髪をシュシュで飾った後輩は、マノンの顔を見てからはっと目を見開く。

　どうして、気がついたのか。モモはすれ違いざまに、きゅっと着物の をつかんで、離す。

　モモらしいアピールに、少し、口元が緩んだ。

　心強い味方がいる。

　現金なことに、それだけで足取りが軽くなった。

　メノウがいた。

　マノン・リベールに化けていたようだが、モモにはわかる。そもそも人間の姿を模した悪魔となっているマノンが聖地に入れるはずもない。あれは確実にメノウだ。

　彼女が無事に入り込んでいるのを見て、モモは内心でガッツポーズをつくる。

　ご機嫌なモモとは対照的に、エルカミは舌打ちをした。

「マノン・リベール……ちっ、カガルマ・ダルタロスの連れか。大陸を騒がせたクズどもが聖地に入り込みおって。カガルマの小僧が、マノン・リベールを聖地に入れるようにしたのか？　 しい……！」

　不機嫌の理由は簡単だ。大聖堂に入り込んでくる面々の存在が気にいらないらしい。特に犯罪者に関しては、処分できないことにフラストレーションがたまっているようだ。

　モモも『盟主』カガルマの名は知っているが、どうやらエルカミでも迂闊に手出しできないらしい。

「大司教」

「なんだ」

「いえ……お仕事、ストレスたまりそうだなって思っただけです」

　ぎろりとにらむ。

「口を閉ざせ。すぐに貴様の教育係を付ける。覚悟をしろよ」

　ごもっともな指摘に、モモは肩をすくめた。

　エルカミに取り入るのは難しそうだった。上役とやらを情報源として期待しようとモモは口を閉じた。

　大聖堂にあるという特殊極まりない駅舎を住まいにしている出入り管理者フーズヤードは、自分のことを普通の神官だと思っている。

　年は二十三。顔立ちはそこそこ、スタイルもそれなり。十歳の頃から低下する一方の視力を矯正するために をかけているのがチャームポイントだと自分では思っている。最近では自分の体の一部となっている眼鏡は自作で魔導式を組みこんで、ちょっとした魔導具にしてあるので、愛着が他の眼鏡愛好者とは違うのだ。

　彼女は十八歳の時に藍色の神官服に袖を通すことを許されている。正式な神官として認可されたのは、平均よりちょっと早い程度だ。特別、才気あふれる だとは自他ともに思っていなかった。

　導力適性は高かったのだが、戦闘には性根が向いていなかった。実戦も重んじる の基準が、学業面では優秀だったフーズヤードには少し合っていなかった。だからどこに所属するようにとも求められることはなく、正式な神官となったフーズヤードは巡礼神官として大陸を旅することになった。

　フーズヤードは自分の性格も含めて平均的な腕前の神官の一人だと思っている。おおむね彼女の自覚に間違いはないのだが、残念なことに一点だけ、常人からずば抜けて逸脱している部分があった。

　フーズヤードは、控えめにいって変態的なほどに『龍脈』を愛していた。

　大地に走る地脈と空に流れる天脈、二つ合わせた星の大動脈。

　フーズヤードの偏執的なまでの執着は、龍脈に対する繊細な導力接続による観測技術に変わり、あるいは素材と紋章の組み合わせによる魔導式での干渉技術へと成長した。

　聖地に引き抜かれる前に大陸各地を巡礼し、未観測なものも含めた正確な地脈の経路地図と天脈の移り替わりの変遷、己が観測した龍脈に即した都市計画書を提出しては旅行資金を稼いで、また別の龍脈を観測して に入る生活を送っていた。

　出世欲も使命感も薄いフーズヤード自身はひたすらに流れる龍脈に沿って巡礼神官をしていたのだが、二十歳の時に、彼女の主観ではなんの前触れもなく大聖堂に引き抜かれた。

　実のところ類を見ないほどの正確無比な龍脈報告書が複数の国の関心を集め、一部の がフーズヤードを求めるあまりに騎士を派遣しては衝突を繰り返す事件が起こっていたのだ。異端審問官が出張る事態にまでなった騒ぎの発端である報告書は、仔細を確認した大司教エルカミがフーズヤードを手元に引き抜くことを決意するほどのものだった。

　基本的にほわわんとしているフーズヤードは、もちろんそんな裏の事実など知らない。

　なんか知らないけど、いきなり大司教に引き抜かれて聖地大聖堂内の出入り管理を任された。それがフーズヤードの理解だ。

　大聖堂は、出入りに【転移】を必要としている。『龍門』を使った転移の魔導陣は導力の経路を構築して人間を通す魔導であり、人工的に小さな龍脈をつくる魔導技術であると言い換えてもいい。

　フーズヤードにとってみればまさしく天職である。しばらくは前任の司教とともに仕事をしていたのだが、師匠とも呼べるべき彼女は半年前に高齢を理由に引退した。ただでさえ機密の多い大聖堂の中にいる若い神官だ。さまざまな雑務がフーズヤードに降りかかることとなった。

　そんなタイミングだったからこそ、自分に補佐官ができると通達されたフーズヤードは泣いて喜んだ。

「やっと、やっと待望の後輩が……！」

　エルカミからの通信を受けた教典を掲げて歓喜に震える。

「そろそろ限界だったんだよ。エルカミ大司教、仕事が急だし。『龍門』管理以外の雑務が多いしさ！」

　彼女は眼鏡の奥の瞳を潤ませる。

　なにせ彼女は数日前にエルカミから長距離転移魔導陣の仕事なんてものを任されていた。突然、一週間で塩の大地までの転移魔導陣の経路を用意しろと言われた時は、あまりの無茶ぶりに涙目になったものだ。

　普通に無理である。実際問題、普通は無理なのだが、フーズヤードは本人の自覚とは裏腹に普通ではない。必死こいてなんとか準備を進めていたが、仕事のあまりの煩雑さに、これが終わったらいい加減に補佐官が欲しいと思い始めていた。

　大聖堂では貴重な経験を積んでいる。特に転移陣など『龍脈』に関わる高度な魔導理論に触れるのは楽しい。地脈と高度な接続を可能とする『龍門』の管理と転移陣の理論構築の発展に一生を捧げることに迷いはない。

　だからこそ、補佐が一人いればやれることも増えると切望していた。

　そう思っていたタイミングで、大司教から補佐官ができることを告げられた。助かったとエルカミに感謝の念を捧げた。フーズヤードは後輩のもとへと向かう。

「失礼しますっと！」

　いったいどんな子が来たんだろうと補佐官が待っているという部屋に入ると、かわいらしい少女が立っていた。

「モモです」

　まだ幼さが残る、桜色のツインテールが愛らしい少女である。自分より、十歳くらい年下だ。この年齢で白服とはいえ修道女ではなく神官なのはすごいと素直に感心した。

　なんにしても見るからに な後輩を、フーズヤードは大歓迎した。

「はじめまして。私はフーズヤード。よろしくね、モモちゃん……って呼んでいい？」

「勝手にすればいいんじゃないですか」

　おそろしく素っ気ない返答だった。

　言葉と表情の熱のなさに づきかけたが、会話を めてはなんにもならない。いまのフーズヤードは、遠距離転移の魔導陣構築に集中したいのだ。彼女は自分の補佐官。人見知りするのかもしれないじゃないかと、仕事を切り分け負担を減らすべく、めげずに話しかける。

「私の仕事は、主に転移魔導陣『龍門』の管理なんだけど、モモちゃんは儀式魔導が得意？　どんなことができるか教えてもらえると嬉しいな。天脈への干渉は難しいだろうけど、地脈操作での儀式魔導に必要な素材と紋章構成を合わせた魔導式の構築とか──」

「は？」

　目の前の少女が、人語をしゃべる異生物を前にしたような顔つきになる。

「地脈での儀式魔導操作なんて、普通に無理ですけど？　常識で考えてください。あれ、一生を費やす専門家の仕事ですよ」

「んん？」

　あれーと首を ける。

　話が違う。自分の仕事を楽にしてくれるための補佐官ではないのか。

　正直な話、フーズヤードの仕事は地脈の繊細な操作ができなければ話にならない。エルカミだって、当然フーズヤードの役割は知っている。知っているはずだ。まさか毎日、大聖堂の出入りを任せている部下に興味がなさすぎて適当な人間を適当に配置したということはないだろう。ないはずだ。たぶん。きっと。おそらく！　ないっ、はずなのだ！

　そんなことがあってたまるかこんちくしょうッ、とフーズヤードは自分を鼓舞する。

　深呼吸をして、気持ちを落ち着ける。自分は、いきなり過大な要求をしてしまったのかもしれない。見たところ、十代の女の子ではないか。いまはまだできないのかもしれないが、きっとこの子は才能があるのだ。

「じゃ、じゃあ教典魔導が得意とか？　教典魔導が得意だと儀式魔導にも向いて──」

「教典魔導なんてほとんど使いません。導力強化で殴ったほうが早いじゃないですか」

「──なんでそうなるのぉ……？」

　フーズヤードは から崩れ落ちて絶望した。モモは明らかに のなかでも戦闘員タイプだと悟ったのだ。間違っても内勤に配置されるタイプではない。ましてフーズヤードの仕事の手伝いなど、論外だ。

　さめざめと嘆くフーズヤードを、モモは冷たく見下ろす。

「さっさと仕事、教えてくれません？　まずは大聖堂の内部のことを知っている限り教えてください、メガネさん」

「め、眼鏡って……う、うん。わかったよ。大丈夫、モモちゃんにも手伝える仕事、見繕うから！　あ、よかったら先輩って呼んでくれても──」

「は？」

「なんでもないですッ、モモちゃんさん！」

　恐ろしい顔ですごまれた。

　重ねて恐ろしいことに、にらみつける時に導力強化を発動させていた。導力量がやばいのを肌で感じる。小心者のフーズヤードは、年下の威圧にあっさりと屈した。

　魂から生成される導力が多い人間は、精神的に危うくなることが多い。やっぱりこの子、戦闘タイプの中でもバーサーカー属性じゃんと上司のエルカミに百回文句を言う。ちなみに直接言う勇気はない。

　なんか、想像と違う。

　理想の後輩とのギャップに半泣きになるフーズヤードは、とりあえず簡単な素材の調達を頼もうと仕事のピックアップを始めた。